

# 「自己確認学習」

## —学業不振学生の学習評価—

佐島 群巳

### Self Validation Study “Learning Assessment of Underachievers”

Tomomi SAJIMA

#### キーワード

自己概念 認識変容 態度変容 学び合い 自覚的変容

学業不振の要因は、「自己概念の曖昧さ」「社会的不適応」「学習指導の問題」の三つが複合的に関わっているといわれる。<sup>(1)</sup> このような問題の生じた学生に「自分とは何か」「自分は何を目的に学ぶか」「一人の社会人として、どのように学び続けるか」などについて、自分の存在・生き方を確認することを意図して、論題の「自己確認学習」を展開するものである。

#### 1 目的

学生は、「自己確認学習」に対してしっかりした目的をもって学ぶことであると考えている。この研究では、学生自ら目的を持って学び、自ら考え、自ら判断し、仲間と関わり合いながら、自らの認識の深化・態度変容・価値観形成を図ることを目的としている。

#### 2 自己確認学習<sup>(註1)</sup>とは

自己確認学習とは、「自分とは何か」「今、ここに生きていることは何故か」「これから自分はどのように生きていったらよいか」と自己に問い、自分の生きる道や価値を見つけていくことである。自ら、自己存在を厳しく問うことは、自分のこころの奥にある本来的な誰でもが持っている悩みや苦しみを乗り越えて、より高い自己水準を目指したい、という願望・希望・夢を実現することである。今、学生達に、こうした夢や憧れを実現させたいからである。願いや夢の実現に努力させることによって、学生は、自己の知られざる価値を発見したり、生きることの意味を自己照明したりすることができるものと考えている。

人間には、さまざまな心情・情念というものを持っているものである。例えば、人間には、目には見えないそれぞれの人間の心の内面に自分では気付かない心情とか、情念とか、意欲とか、意志とか言われるものが存在するものである。人間の内面には、次のような心の<sup>ひだ</sup>襞とのもいえるものを持っているはずである。例えば、「願望」「希望」「憧れ」「抑圧への抵抗」「つまず

きの克服への意欲」「満たされない自分への嘆き」「欠乏からの脱却」「満足感」「充実感」「達成感」など自分を表現する心の照明というものを「自分自身」に向かって問い、自分の生き方を表明するもので有り得るのである。

自己確認学習は、自ら学ぶ課題を意識して、その課題に意欲的に、積極的に、主体的に取り組み、課題解決の見通しを持ったり、あいまいな自己概念に気づいたりして問題解決を可能にする学びをしていることである。そして、自己確認学習の本来的意味は、事実を発見したり、事象の関係を認識したりして、問題解決の面白さや楽しさを実感し、「これなら自分でもできる」という学習への方法を発見して、学び方の能力・態度形成を図り、学習への自信と充実感・達成感を実感的に体得することである。

学習において誰でもが、学習のつまずきや困難点に直面することがある。そのような場合、「諦めたり」「自分では無理だ」とつまずきや困難点から忌避したり、逃避したりして弱い自分をさらけ出してしまうものである

例えば、つまずき、困難点が生じたとき、教師は、

その子、その子のつまずき、困難点の背景、原因を明らかにすることである。例えば、次のような教師の指導の手立てが必要となる。

学習におけるつまずきや困難点が生じたときには、「諦めることなく」持続的に学び続けるように「学び方を学ぶ」方法を身につけさせることである。「学び方を学ぶ」には、次のような「動機づけ」「学習への接近方法」「繰り返しのトレーニング」するなどの学習の原理と方法<sup>(2)</sup>を実際の学習の場面で習得させることである。

例えば、学生が学習のつまずいた時には、「今何を学ぶのか、何を明らかにするのか」を問い、学習の目的を意識化することである。「あなたは、今よりもっとわかり、できるようになりたいでしょう」「あなたは、こここのところに着目して考えてみよう」と学習の方向や意欲を喚起することが肝要である。

自己確認学習を充実させるためには、「学習の一人学

び」から「仲間と学び合いながら」問題解決のアイデアを出しあったり、その中から大切なものを発見したり、価値づけたりして相互に学習の質を高めていくことである。自己確認学習は、個性的な発想・思考を基盤としながら「仲間との学び合いを通した」集団思考や協働の役割意識の醸成を図り、「創造愛」「社会性」の形成をも図ることができるのである。

### 3 自己確認学習の実践プログラム

表1は 自己確認学習プログラムの実践過程における学生の自己発見、自己理解、他者理解の様態と学生の認識変容・態度変容を期待できるように策定したものである。自己確認学習は、自らを問い、自ら考え、自ら判断し、他者とかかわり、他者の指摘や修正点を手がかりに自らをふりかえり、自己認識を深め、学習能力・態度を形成することである<sup>(註2)</sup>。

表 1 自己確認学習プログラム

月/日	主な活動	ねらい・評価の視点
6/4	①大学生生活の振り返り(400字) <u>指摘し合う</u> ②一人の人間として、社会人としての在り方	・自己確認をしているか
6/11	①地域のフィールドワークにおいて安全・危険を探す ②地域観察の結果をレポートにまとめる(まとめ方 A 目的、B 方法、C 結果)(800字)	・自ら地域社会への関心・所属意識を持っているか
6/18	①レポートを交換して「コメント」をつけ <u>認め合う</u> ②地域の一人の市民としての在り方(400字)	・自ら地域市民としての在り方を自覚しているか
6/25	①「NIK 学校教育番組「みんな生きている『いつまでも いっしょだよ』」を視聴する ②視聴のポイント(このポイントに従って800字に自分の考え・感想を書く) <u>共通点を指摘し合う</u> <視聴方法> A タイトルを示す B 映像の中で心に残った事を書く(印象) C 映像の中で最も大切なことを書く(価値) ③Cの映像の「大切なこと(価値)」をめぐって話し合う ④GWのあと「自分の考え・感想を書く」(800字に書く) そのまとめをもとに、 <u>相互に意見を交換し合う</u> 。そして <u>相互に相手のよさを認め合う</u>	・5歳児の航平君は、白血病に罹りながらも家族の愛を受け生きようとするその姿に「生命の尊さ」を開眼できたか ・映像視聴から「5歳児の幼児の生きざま」に触れ、人間とは何かを考え、自分を見つめることができたか、 ・視聴方法ABCの視点から「映像への共鳴・共感」をもって800字に書くことができるか ・短時間のあいだの学習について自らを振り返って「今の自分について自分の在り方・生き方を問う」ことができたか
7/2	①これまでの『自己確認学習』から『自分のこれから在り方・生き方について』800字にまとめる ② <u>相手の書いた事を承認し合う</u>	・自己改革・自己実現への願望(自覚的変容)を持つことができたか

## 4 実践過程の分析と考察

### (1) 自己の在り方を問う (6月4日)

自己確認のための学習は、一人の学生として、一人の人間としてどのように学び、どのようにふるまい、どのように生きるかを絶えず自分に問いかけていくことが、この学習の意味するところである。デカルトの「我思う、故に我あり」は、自己存在を自ら問い、「考える自分」「行動する自分」に目覚めさせることである。そして、現実の自己水準を高めようとする生き方をする人間形成を目指すものである。

この自己確認学習に参加する学生は、若干、自己中心的な主張が強かったり、社会的適応力がなかったり、学びの目当てを持つことができなかつたりして「自分というもの(自己概念)を曖昧にしている」状態にいる学生である。このような学生は、「今ここにいる自分」「これからの自分」を意識しながら学生生活を歩んでほしいと願っているのである。

そこで、次のような問いかけをしたのである。

「皆さんは、大学に入学して、まだ、2カ月といても、もうすぐ教育実習に参加、教育実践をしていかなければなりません。」「この時期に『あなたたちは、本当に教師や保育士を目指そうとしているのか』をより明確にしていないような“ふるまい”をしているように思われる。そこで、つぎのようなことに答えていただきたい。」と言って、次の問1を与えて答えてもらうのである。

問1 「今、学生生活を振り返って、これから目指すものは何か」について、あなたの考えを述べなさい。(400字にまとめさせる)

問1に対する学生の意識や考えは、次に様なものである。(○内数字は頻度数)

#### ① 学習態度への反省や大学生としての自覚が不足して「気の緩み」のあった

学生は、この問いに対して素直に答えているのである。例えば、次のようなものである。(10名の中の頻度)

- ・遅刻・欠席一重要な授業にまじめに出席しない (8)
- ・居眠り・私語をしている (6)
- ・入学してうわついている (2)

- ・高校時代の気分が抜き切れていない (2)
- ・学ぶ立場を忘れてしている (2)
- ・まだ、目標をつかむことができない一欠席が多いのでは  
ずかしい (1)

この反応は、学生として、また、自分の生き方に対して、誠実さを失っているといっても言い過ぎでなかろう。これは、学習停滞・学業不振をもたらす要因の一つであるように考えられる。自分を少しでも成長させたい、という願いが見えないのである。学生は、自ら自己概念の曖昧な存在を自ら認めているのである。このような状況に我々は、無関心に見過ごすわけにいかないのである。

しかし、一方、僅かながら次のような反省点が、みられたのである。

#### ② 自分の目指したいことが「はっきりしない」

自己の目指すことに対しては、次のような「曖昧な自分」にしっかり向きあべきであると自省した言葉がみられる。

- ・来年20歳になるので言い訳をやめる (1)
- ・じぶんの弱いところを認め、同じ失敗を繰り返さない (1)
- ・むかつくとか、ないとかは通用しなくなった (1)
- ・早く寝るようにしたい (1)
- ・奨学金まで借りて入学したのでちゃんと卒業したい (1)
- ・アルバイトをして学費を稼ぐ、そのため居眠りをなくする? (1)

#### ③ 自分の社会的責任

このことに対しては、次のような自分の在りよう、生き方、社会的関係から、行動していきたい、という考えを導いているのである。

- ・親孝行のため立派に保育士になるよう頑張りたい (1)
- ・資格取れば何かと便利だから、頑張って取ろう (2)
- ・子どもと関って行かなければ生きていけない。関われば笑顔、本当に生きていける (1)
- ・保護者からも子どもからも信頼される保育者を目指したい (1)

以上のような学生の意識や行動への動機は、現段階入学2ヶ月の偽らざる問いに対する発想である、と考える。上記の学生の記述からは、個人個人、大学生になったという自覚の片鱗を僅かながら見ることができるのである。問いに対する学生の反応の「気の緩み」「目的の曖昧さ」「自分への不誠実さ」「目的不在」と言う②③は、①の「大学生としての自覚が足りない」

という考えと矛盾を抱えながら、今を生きているという  
ってよい。まさに、19歳という心理的不均衡、自己概  
念の曖昧さを如実に物語っているのである。こうした  
矛盾・葛藤を抱えながらも最初の問いに、一方、僅か  
ながら学生は、この大学に入学したことへの「自己願  
望」というものも垣間見ることが出るのである。しか  
し、こども教育学科に入学し、幼稚園教諭・保育士を  
目指すという目的意識の薄弱さ「確固たる自己形成」  
の願い、自己実現への自覚的展望を見取ることができ  
ないのである。

自分の夢のためつらい時は、自分の夢を思い出して  
元気を出して頑張りたい。\_\_自分を見つめ直して頑張  
りたい\_\_夢を持って入学したはず、夢を叶えたい\_\_勉  
強していきたい(7)

しかし、上記のように学生は、曖昧な自分の中にも、  
「自己目標の実現」を果たしたい、という学生の意識  
が少し見出されたのである。このことから筆者は、彼  
らの学びに期待をかけたい、という気持ちに駆られて  
いるのである。疑いもなく、筆者は、彼らの自己現実  
を確かめたいのである。

上の各自の書いたものに相互に思いや願いを共有す  
る意味で、仲間のまとめ文を読み合ったのである。さ  
らに、彼らの「集団討議」の過程から自らの考えを導  
き出した後に、次のような問2を与えた。

問2 「仲間話を聞いて、自分と共通している点や  
異なる点を確認するとともに、自分はこれから  
をどのように改善・充実していったらよいか」  
大学生として、一人の人間として、一人の社会  
人としての在り方についてあなたの考えを述  
べなさい。(400字にまとめる)

すでに述べたように、問1に答えた後の集団討議を  
受けて、学生自らは、「今後、どこを、どのように修正、  
改善していったらよいか」自分の生き方、在り方につ  
いて考えを率直に述べているのである。しかし、「意識  
的に自分の在り方・生き方」を変えようとする意欲、  
意志力は、見られなかった。例えば、次のような反応  
例に注視したい。(○内数字は11人中の頻度数)

a)学校中心の生活に変えていきたい\_\_学生時代に直さな  
ければならない\_\_自分の意志が弱いからである。(7)

b)バイトだからと言って疲れて、寝坊したり、遅刻したり  
しないことである\_\_遊びを控え早寝、早起きをする(3)

a)は、自分という存在をこの機会に改めて見直したり、  
自分に問いかけたりして、自らを変革していかな  
なければならない、ということを確認しているのである。  
また、b)は、いずれも自分の問題状況・欠如状況に気  
づいているのである。自分は、日常生活を改善してい  
かななければならない、ということを反省しているの  
である。

しかしながら、自分の置かれている立場・生き方  
に対して誠実に対応するという強い意志力・意欲性・積  
極性がみられないのである。さらに、次のような反応  
がみられるのである。上記のa)、b)の学生は、自分の  
在り方に意識しても、その意識を行動化にまで高めよ  
うとする強い意志力は、育っていないということであ  
る。この現象は、最近よく言われる「モラトリアムの  
人間存在(青年として未成熟で、社会人として自立し  
ていない状況)」に起因するものである<sup>(3)</sup>。

d)最後の約束、両親に思ってもらうためにも、精一杯  
努力したい(2)

c)夢を応援してくれる親に答えたい(4)

上のd)とc)の学生は、親の援助を受けて大学で学ん  
でいることに対する若干の<sup>かしゃく</sup>呵責の念にかられている  
ささやかな良心の現れであるろうか、と考えさせられ  
る。しかし、自覚的な学生として目的実現への願いは、  
皆無である。ここに、この自己確認学習で学ばせる意  
義があるのである。そのため、

f)親に感謝をする気持ちを持ち続ける(1)

という素直な気持ちを持っている f)学生もいる。更に  
自分を見直し

g)「今から新しい自分を作っていきたい(1)」「相互に励ま  
し合って学びたい(1)」「みんなで成長していくべきだ  
(2)」

等の未来的指向の考え方へと変化が見られたもので  
ある。

(2) フィールドワークから「地域の安全・危険の  
実感」

6月11日学生は、「安全マップ」を持参して、実  
地に安全なところ、危険なところを調査した。

「安全マップ」は、渋谷区立中幡小学校のPTAと教  
師、地域の方々が児童の登下校の安全確保を目標とし

て作成されたものである。学生は、実際にフィールドワークを通して、どの道が安全であるか、どの道が危険であるかを、地図上の道と実際の道とを比較、検証したのである。ここは、「確かに道が狭く、曲がりくねっている」ので、人通りが少ないので危ない」事実即して反応しているのである。

そのフィールドワークの途上「安全マップ」作製の当事者である中幡小学校の副校長谷村先生から「安全マップ」の作成過程および作成の意義、その活用の効果について説明していただいた。

フィールドワークの後は、レポートの課題を提示する。レポートの様式は次の通りである。

テーマ「幡ヶ谷の安全と危険な場所」

- 1 観察の目的
- 2 観察の方法
- 3 観察の結果
- 4 結論
- 5 感想

フィールドワークの後、学生は、地域の安全マップの確認と地域観察を通して発見したこと、明らかにしたことを基に800字のレポートにまとめる。

学生には、「6月18日そのレポートを巡って学生相互で討論する」ことを予告する。

(3) レポートを基に「地域社会の一員としての立場」の検討(6月18日)

レポートを基に学生相互に地域観察と安全マップ作製の意味・役割について検討するために「校区の安全な所、危険な所」を確認しあって『安全マップ』を作成した事実を確認をした。この事実認識からグループ課題である「結論」をめぐる学生の相互評価・討論を進めることになるのである。

① レポートの結論を中心にグループで相互評価

相手のレポートのまとめた内容について相互に評価し合う。特に、フィールドワークで発見したこと、認識したことの優れたところにマーカーをして自分の考え方と同じこと、共感できること、学ぶべきことなどを抽出し「その抽出したところに相手の立場を考えながら相手の意味づけに対して解釈・コメントをつける」

という認め合う相互評価活動を展開した。認め合いの相互評価活動は、他人の欠点を見つけるだけでなく、相手のよさから学ぶ学習行動を強化することにある。このことによって他者から学ぶ「承認する態度形成」を図ることが出来ると考えたからである。

② 話し合ったことコメントしたことの報告

ここでは、相手のまとめた結論を「よく読んで最もよく考察したところに着目し、評価者のコメントしたところを報告する」ことである。上でも述べたように相手の優れているところを見つけて、その良さを認め合う活動は、学生同士の相互理解と相手を認め合うという人間関係の調整を図る能力・態度の形成に資するものと、考えられる。

学生は、相手に認めてもらうことによって「やればできる」「もっとやろうと全身で事柄に立ち向かう」という前向きな意欲性・積極性が醸成出来るものと考えられる。このような活動を通して、いわゆる「自尊感情」を持たせることが出来る、と考えられる。

③ 地域社会に一員としての在り方

地域のフィールドワークを通して、地域の中には、「安全な場所、危険な場所」のあることを確認した。各自に「これまでの観察調査」から地域に対するイメージや認識様態を表2にまとめた。

表2 地域への所属観 (11名中)

(傍線筆者)

分析カテゴリー	地域市民からの発想：() 内数字は頻度数	導き出された結論
地域に一人の市民としての在り方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「そこに住んでいる人も、そこに来る人も」何を感じているだろうか</li> <li>○安全な場所、危険な場所はある。危険な場所は改善したい</li> <li>○市民の一人として自覚して行動したい</li> <li>○市民の一人として真剣に考え、<u>他人事でなく ボランティア活動をしていきたい</u></li> <li>○地域の市民として街のことを把握し<u>子どもの安全を強化するとともに環境を良くできればいいと思う</u></li> <li>○住民の一人として自覚しなければならない。<u>地域の人と「共生」していくこと。この地域観察から学生生活に生かしていきたい。</u></li> </ul> <p style="text-align: right;">(5)</p>	○狭い道、暗い道があった。危ない道は、改善する必要がある。本来安全であるはずの「学校通学路」だからである。
固い地域観	<ul style="list-style-type: none"> <li>○私の故郷は、中幡ではない。A区であって、<u>市民になるつもりはない。私は中幡のことをまだ分らない。大きく「わかれろうとしない」</u></li> </ul> <p style="text-align: right;">(1)</p>	○狭い道にバイクが入ったら、「黄色いコース」「赤いコース」は子どもを歩かせて作ったマップ、子どもの目線のマップだ
地域への関わり	<ul style="list-style-type: none"> <li>○地域市民も危険なので協力していかなければならない地域</li> <li>○観察でたくさんの発見が出来た</li> <li>○レポートを書くのが知らなかった</li> <li>○私は短期大学に通っている以上<u>地域の一員だ</u></li> <li>○今まで地域のことは何も知らなかった</li> <li>○先生方がマップ(map)を作った。<u>幼児や老人にとって危険のあること目をつければよかった</u></li> <li>○私は地域を見る目を持ちたい</li> <li>○学ばせてもらってありがとうございます</li> </ul> <p style="text-align: right;">(8)</p>	○副校長の「安全マップの」作り方、使い方について話を聴けたのは大変良かった

表2は、フィールドワークの後学生各自の「地域に対するイメージや認識」を800字に書いてもらったものをカテゴリーに分類したものである。これを見てわかるように、実地に地域を観察し、中幡小学校谷村副校長の話を聞いて、学生なりの実感のこもった中幡という「まちへのイメージや認識・地域観」を持つことが出来たのである。表2の傍線の学生のイメージや認識は、地域を見たこと、安全マップについて聞いたことなどを総合して、素直な反応を示したものであると言える。

Sという学生は、<sup>かたく</sup>頑なにまで「わが故郷はA区だ」と地域観を持っている。この学生は、この自己確認学習の後どのよう<sup>ごと</sup>に地域に対するイメージや認識の変容が見られるかを確かめていきたい。

かつて「郷に入<sup>ごと</sup>っては郷に従う」の諺があるように、これは、「人はそこに住んでいる人の風俗・習慣に従うのが人間の処世術である」という意味でつかわれていた。これは、地域の人との融和関係と相互扶助の関係を深めるという事を実感することを通して「居心地良い場所」が得られるのである。このような関係の得ら

れる事が日本型「和の文化」であるともいえる所以である。

ところが、最近では、「地域離れ」「隣の人は何する人ぞ」の言葉があるように地域に対する無知・無関心の状態が顕在化しているのである。このことは、現代社会の人間の孤立化と人間疎外をもたらしているのである。このことが不安社会・無気力社会・無縁社会を作ることにも繋がりがかねない。日本人の本来持っていた心のよりどころ、日本文化の良さである「かかわり」「つながり」「わかちあい」の和の心を失ってしまうのではないだろうか。このようなことによって社会連帯感を失い、人に対するやさしさをもって触れ合うことも、人やものを大切にすることも喪失してしまうのではないか。このことが、いざ危機的な問題に直面した時、困っている人がいても、見てみないふりをする「傍観者」「私には関係ない」という利己的なふるまいをする人間不在の社会、人間不信の社会を招くのである。もはや、公共性も、社会的倫理も失った人間の危機を感じざるを得ないのである。

このような問題事態を克服するには、私たちは、どうしたらよいだろうか。

帝京短期大学は、地域の人たちから、関心を持たれ、心情的にも「あの大学生はとてもいい」「あの大学があるのでとても助かっている」という評価されることを期待したのである。また、地域の人たちは、そう望んでいるはずである。その良好な評価に反して「どうもあの大学は?」「あの学生はどうも?」と疑問点が付されては、地域に存在する大学の価値を失うことになる。

そのためにも、こども教育学科では、「地域ボランティア」「地域環境調査」等のよって、地域のことによく理解して、地域に何らか貢献していこうとする試みをしていく必要がある。この試みは、心豊かな人間関係を深めていく学習を進めていくことが不可欠なことである。今回の自己確認学習は、地域観察を通して「地域理解」と「地域社会の一員としての自覚」を持って、帝京短期大学生として行動してほしい、と願って実践したことも一つのねらいでもある。

#### (4) 総合番組「みんな生きている」の視聴

NHK 学校放送「みんな生きている」は、総合番組として開発されたものである。そもそも総合番組が構想され、番組編成されたのが、今から 20 年まえからである。

最初に開発され、番組編成されたものは、「にんげん家族」という番組であった。筆者は、十数年間にわたって番組編成委員として「にんげん家族」という「総

合番組」づくりに関わってきたのである。この番組は、人間の存在・人間の特性・人間の働き（機能）などを多面的・総合的に認識を深めるとともに、この番組視聴から「人間とは如何なる存在か」「自分はどうか」「自分は人間としてどう生きていったらよいか」「今ここに生きている自分はどのような意味があるか」と自己照明したり、自問したりして自己理解を深め、自己概念を確立していくのに最適教材であると考え自己確認学習に取り入れたのである。

総合番組「にんげん家族」の後、開発されたのが総合番組「みんな生きている」である。

総合番組は、教科横断的に活用する視聴覚教材である。学生が視聴した番組は「いつまでもいっちょだよ」というテーマの番組である（この番組の視聴過程については別の項で説明したい）。学校放送「総合番組」は、文字通り「総合的学習」福祉・健康をテーマの一つとして「幼児の病をめぐる家族の絆」についてテレビ視聴を通して「命とは何か」「家族の愛とは何か」「生きるとは何か」等子どもたちの問いかけの応えるものである。

「みんな生きている」という番組は、総合的学習や道徳教育の教材として活用されているのである。

「みんな生きている」の番組の「学習ねらい」については、NHK 学校放送テキスト（平成 18 年度）に次のように述べられている。

13 年目を迎えたこの番組では、子どもからお年寄りまで、さまざまな人間の姿をドキュメンタリーで紹介します。一人ひとり違った感じ方・考え方があることに気づき、お互いに違いを認め、「いのち」の重さ、尊さを感じ取ってほしいと願っています。

頻発する自然災害、不況、リストラ、家庭不和、児童虐待など、子どもを取り巻く環境は、必ずしも明るくありません。おとなたちさえ確かな価値観を失いがちな時代です。しかし、そんな中で前向きに生きようとする、力強い子どもたちの姿があります。

「夢を持つ喜び」「人の心のきずな」そして何よりも「生きていることの素晴らしさ」・あたりまえのことの大切さが問われる時代だからこそ、純粹にひたむきに生きようとする子どもたちの姿は、未来への希望と勇気を与えてくれます。子どもたちの本来持っている力や強さやみずみずしい心をのばすのが、今こそ必要な事ではないでしょうか。

番組では、人が生きる途上で出会う悩みや苦しみに正面から向き合っていこうとする姿をドキュメントします。

その生き様に込められたメッセージが、子どものこころを耕すとともに、豊かな感性を引き出すことが出来たらと考えています。

子どもたちが番組を視聴して、どのように受け止めたか、ぜひ、制作する私たちにも教えてください。次の取材の参考にさせていただきます。

(傍線筆者)

① 「いつまでも いっしょだよ」を視聴させた意図

自己確認学習において総合番組「みんな生きている」を視聴させる意味は、改めて映像に表出する「人間の生きざま」に触れさせることである。学生は、映像に登場する人間との出会いによって、人間の本来の在り方、生き方を見つめ直すことを通して、「自分の生き方、在り方」の覚醒の動機を与えるとともに、自己の存在価値を自己確認することにあるのである。

この「いつまでも いっしょだよ」という番組に、登場する主人公航平君は、回復不可能な白血病におかされている。幼稚園でいう年長5歳児に当たる航平くんは、重い病で病院での暮らしをしているのである。本人は、病と闘い「元気になりたい」という願望を持って、苦い薬をもちとわず飲む努力をしている。薬の影響で頭髪がぬける痛々しさが映像に映し出されている。病室では、航平君に愛情いっぱいの関わりを持っている母親のしぐさに感動を与えるのである。撮影している父親の姿は見えない。しかし、その映像は、きっと父親の子どもの病の辛い、その苦しみの姿を「ファインダー」から見つめて撮影したものであろう。その物言わぬ父親の言葉よりも「ファインダー」から覗くわが息子航平君の痛々しい病と闘う姿に「よくがんばってるね」「航平が一生懸命生きているのでお父さんも頑張るよ」と言葉かけしているようにも映像から伝わってくるのである。

そうした子どもの様子を眺めながら「親と子どもとの愛のあふれる」雰囲気ホームビデオに表出しているのである。

この映像は、テレビカメラマンの撮影した映像と違って、父親の航平君への生きる姿を記録にとどめておきたい、「何とかして病を克服して欲しい」という願いが込められた映像になっているのである。したがって、視聴者にありのままの航平君、お母さんの心遣い、弟たちの航平兄ちゃんへの思い等が素直に映し出されているのである。それだけに、その映像は視聴する者への訴える力となっているのである。

② 視聴のポイント

- 1) 番組の「タイトル」を示す(視聴する)
- 2) 「印象に残ったこと」記録する

3) 映像の「大切なところ」をノートにかく

4) 「大切なところ」をめぐってグループで話し合う

③ グループで話し合った後 800字に自分の考えを視聴ノートにまとめる

まとめた視聴ノートを相互に交換して、航平君の生き方への共感したこと、考えたこと認め合う。

④ 視聴ノートの記述分析考察

「いつまでも いっしょだよ」という番組は、前述したように5歳の航平君の白血病との闘病生活と航平君を取り巻く家族との関わりの様子を映像にしたものである。

「いつまでも いっしょだよ」を視聴した学生は、航平君に対して、家族に対してどのような意識や認識を深めることが出来たであろうか。表3は、学生の視聴ノートから導き出した学生の航平君の生きざまや家族の人間関係についての意識・認識の様態を表したものである。

表3の筆者傍点は、「いつまでも いっしょだよ」のテレビ視聴した学生の感動・共感した部分である。

11名全員の学生は、映像の中の航平君をめぐる家族の絆の深さを強く感じ取っているのである。その絆は、親と子との愛情あふれるものであった。親と子の会話やしぐさに病に苦しむ航平君へのやさしさが見られるのである。

表3 テレビ視聴「いつまでも いっしょだよ」(傍線は筆者)

11名中

分析カテゴリー	具体的内容	頻度
A 家族愛・人間愛	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家族の絆は強い</li> <li>・<u>親子の愛・家族愛をこのテレビは語っている</u> (自分の安全を大切にしたい)</li> <li>・<u>こんな温かい人間的愛情がなくなってしまう</u> ことである</li> <li>・二人の弟とのつながり <u>死の直前</u>まで下の弟お誕生日のメッセージを書く</li> <li>・<u>死の直前酸素室からやっとの思いで弟たちと手を差し伸べて触れ合おうとする</u></li> </ul>	11
B 航平君の強い意志	<ul style="list-style-type: none"> <li>・普通4～5歳なら思いっきり遊びたいのに我慢している (弱音をはかず、一生懸命に生きている)</li> </ul>	8
C 闘病への共感 生きることへの大切さ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・白血病になって苦しい治療をうけ生きている、頑張っている</li> <li>・5歳3カ月でこの世を去っていく、家族を残してやりきれない</li> </ul>	6
D 生命の大切さ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・航平君の生き方は、辛い、苦しみの中の笑顔である。「生命の大切さを教えてくれた」</li> </ul>	3
E 現代社会へのなげき、批判	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<u>今の社会は、冷たい心を持った人が増えている。便利な生活、金のみで人間の情が薄れている</u></li> <li>・神は「信じる者は救われる」</li> </ul>	2
F 自己対象化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分たちは、大学に通っている。友達がいて、家族がいて<u>一日終わって「当たり前」明日のない人に比べて有難い</u></li> <li>・自分の家族を大切に、温かい世の中になるようにする。頑張ってもらいたいと願う</li> <li>・今二人兄弟「<u>当たりの食事、話し合える幸せ</u>」を忘れない</li> <li>・笑顔周りの人の幸せは、本当に大切なことだと考える</li> </ul>	5

表3は、「いつまでも いっしょだよ」番組を視聴したノートから抽出した結果である。

学生の全員は、航平君と家族の関わり方への共感を深めている。すなわち、「家族の絆」「親子の愛」「こんな温かい人間的関係がなくなってしまう」という意識・認識は、現代社会のもつ非人間的な陰湿ないじめ、暴力、虐待などの世相を反映した感情からの解放、明るさを希求する姿である。

最も反応の多いのは、航平くんとその家族の愛の絆、人間愛というものを実感しているのである。その家族愛というものは、「死を迎える航平くんの力の限りを尽くして、酸素室からやっとの思いで、弟との別れを惜しむかのように手をさしのべている」風景に学生は、感動しているのである。(11名全員の反応)

このテレビ映像は、プロのカメラマンでない航平くんの父親ならではの人間愛溢れる映像を創り出すことができたのである、と考える。父親は、ファインダーから「航平、がんばれ！ 航平、がんばれ！」「家族みんな、見守っているからな！」と無言のメールを送

りながら、撮影したに違いない。したがって、この『いつまでも いっしょだよ』という映像を視る者へ「命の尊さ」「生きようとする意志力」そして「家族愛」「人間の温もり」というものを語りかけ、感動を与えているのである。この映像を視聴した学生の中には、絶句して目頭を押えるもの、沈黙のうちにその感動を紙に書くものが見られ、暫く静寂の時を刻むのであった。

大半の学生の視聴後のノートには、「自分は生きていく心構え、自分は、人の支えがあり、今生きていることへの感謝をしたい。家族を大切にしたい。」と答えている。

すぐれた映像は、年齢や学年を超えて、視聴者に「訴える力」「感動を与える力」「自分を見つめる力」を与えるものであるということが検証できた。

この「みんな 生きている」の視聴した学生は、改めて、「命」「家族愛」「限りある命」「5歳児の生きるたくましさ」というものを自分のことのように気づき、考え、判断して「自分の生きることの大切さ」「これか

らの自分の生き方について価値判断をしている」のである。まさに、航平くんの生きざまから「自分は如何に生きるか」に開眼したのである。

(5) 自分を見つめた 5 日間の学び合い「これからの自分の在り方を問う」

5 日間の自己確認学習は、仲間とともに自分を見つめ自分の在り方。生き方を真剣に考える動機づけをあたえてきた。そこで、最後の問 3 を与えて、5 日間

の学びを振りかえったのである。

問 3 5 回にわたる自己確認学習において学んだことからこれからの「自分の在り方、生き方」についての自分の考えを述べなさい。(800 字)

800 字に書く作業は、さほど負担を感じないようである。以下「これからの自分の在り方について」述べたことを例示してみよう。I 女は、次のように述べている。

今回、この補習を通して私は、たくさんのことを感じる事ができた。  
幡ヶ谷という地域について、安全な場所、危険な場所を調べ、それについての話し合いを行ったり、「いつまでも いっしょだよ」(学校放送「みんな生きている」)という教育テレビ見たり、一見、大学生活には、特にかかわりのないように見えるものばかりであった。  
しかし、4 回の補習を終えたいま、この学習と大学生活のたくさんのつながりを感じた。帝京短期大学のある幡ヶ谷で勉強している以上、幡ヶ谷という町をちゃんと知り、理解することが重要であることを知り、地域づくりに参加する姿勢を忘れてはいけないと思った。また、自分でレポートを作成し、話し合いを行うことで、相手の考え(意見)を聞いたり、自分の考えも伝えることができたり、一つのことをみんなで取り組む大切さ、楽しさも感じる事ができた。これは内部が違っていたとしても、大学生活にとっても重要なことであるし、わたしたちは、幼稚園教諭や保育士を目指している立場であるから、そういうことを感じたことはよかったと思う。  
教育テレビのビデオに関しても、大学生活の関係ないように思えるが、ビデオを見て作文にまとめることで、つながりが見えたように思う。学校に通っていることや、体を動く、ごはんを食べる、のような当たり前のように見えることにも、感謝すること。友達、兄弟と遊んだり、話したり、自分にかかわっているひとに幸せを感じることも航平くんから教えてもらう事ができた。  
だから、これからの大学生活や、その他の生活においても、私は、この学習で学んだことが生かしていけるようにお努力したいと思う。この補習で感じたり、学んだりしたことを、忘れてはいけないと思った。(I)  
(傍線筆者)

私は、これまで 4 回の学習で、たくさんのことを学んだ。  
大学生活を振り返り、これから目指すものを話し合い、改めなければいけないことが、あるということを学んだ。また、地域の安全マップのことで、幡ヶ谷の、地域に一人の市民として、街を歩き、安全な場所、危険な場所を真剣に色々チェックした。そして、レポートにまとめ、みんなで幡ヶ谷について話し合うということは、本当に意味のあることで、必ずこれから役に立つと深く感じた。  
そして、先週見た「いつまでも いっしょだよ」というビデオでは、今までの学習と違い、命は、大切だということは分かっているが、毎日があたりまえになってしまいがちだと思った。毎日「明日、死んだら・・・」などと考えてしまうのもあまりよくないと思うが、最低限私は一日一日むだにしないようにしっかりと悔いのないように生きていきたいと思っている。これはどうにでもいえると思うが、これからは口で言うだけでなく、行動で示せる人間として成長していきたいと思う。口で言うのは、本当に、簡単なことだと思ふ。それを行動に示すことが、難しいのであって、本当に行動で示すことのできる人は、人間として齟齬(そご)いていて、ただ単純に格好いいなとおもっている。この学習で学んだことを、必ず活かして行きたい。  
そして、これからは、きちんと大学生としての気持ちをもち、けじめをつけて生きたい。そして、仲間とも、「良い友達」になるように、普段は、楽しみ、支え合って、時には、注意し合うような、そんな気持ちを持って、また、頑張っていきたい。  
(K)  
(傍線筆者)

自己確認学習の最終日に書いた I と K の文章から、5 日間の学びは、自分たちにとって多くのことを学ぶ良い機会であったというのである。

例えば、I は「安全マップ」を手がかりに幡ヶ谷という地域めぐりを通して通学する子どもの立場にたつて、「地域づくりへ参加する姿勢をわすれてならない

(I)」というとらえ方をしている。また「市民として、まちを歩き『安全な場所』『危険な場所』を真剣にチェックした (K)」このようにして地域理解、地域参加の必要性を実感しているのである。

また、「いつまでも いっしょだよ」NHK 放送番組を視聴して、登場人物白血病で入院している航平くんの病との関わりとそれを取り巻く父母・兄弟の愛の絆に共感している学生がほとんどである。K は、「悔いのないように生きていきたい」という。

この学習で学んでいることは、関係がないと思っていたが、「すべて学習と大学生活と関わっている」と考えるようになった、というのである。

いずれにしても 5 時間の自己確認学習において、自分と他者とが「支え合う関係ができた、その気持ち

持って、頑張っていきたい (K)」とか、「ここで学んだことを生かしていくよう努力したい (I)」と自覚的変容<sup>(註3)</sup>をみることができるのである。

また、仲間と情報を交換しながら、相手の叙述内容のすぐれた考えには認めてあげたり、改善すべきところは理由や根拠を挙げて指摘したりする学び合いの場と時間を与えることである。このことは、物事を深く考え、判断する力を培うことができるからである。I が指摘しているように「自分でレポートを作成し、話し合いを行うことで、相手の考え (意見) を聞いたり、自分の考えを伝えることができたり、一つのことをみんなで行う大切さ、楽しさを感じることができた」というのである。これは、まさに、学びの楽しさ、喜びを実感した瞬間であり、自ら自尊感情の醸成につながるものとする。(4) このように、一人学びから仲間と学び合い、支え合い、認め合いの学習は、自らの成長、自己実現を可能にするものであるといえる。

## 5 結論—自己確認学習の振り返り

この自己確認学習の当初の学生の反省点をみると、学生は、学びの存在感、学ぶ意欲、目的意識が曖昧であった。学生としては、どうふるまい、自ら学びの能力・態度を高めていくかが明確になっていないのである。まさに、「自己概念」の曖昧さを露呈しているのである。

ところが、その自己概念の曖昧さは5回の自己確認学習を終了するにあたって次のような考えを述べるようになるようになったのである。

- ・これから目指すものを話し合い、改めなければいけないことがあるということを学んだ。
- ・私は、幼稚園教諭・保育士を目指している立場であるから、そういうことを感じたことはよかった。

この二つの考えは、はっきりと「今 ここで学んでいることの意味を自ら確認した」ということである。と同時に、次のような認識を示したものがある。

- ・これからは口で言うだけでなく、行動で示せる人間として成長していきたい。

と、自ら目標を持って、実践していかなければなら

ない、と自覚的変容を見ることができるのである。また、この学習から『関わりの重要性』について述べたものがある。

- ・一見、大学生活には、特にかかわりないように見えるものばかりであった。しかし、4回の補修を終え、この学習とのたくさんのつながりを感じた。

「つながり」の実感を可能にしたのは、次のような「自己確認学習の活動」を毎時間取り入れたことによるものと考えられる。それは、表1「自己確認学習プログラム」の活動において指示したように「自分の行動の振り返り」「野外観察・テレビ視聴についての自己認識」「自分の在り方・生き方について自己確認」する活動を連続的・発展的に展開してきたからであろう。このつながりを実感させるためには、自分で書いた文章を仲間に読んでもらい、他者の目からの評価 (意見・コメント) をしてもらい、そして、自らのよさを発見したり、自らの認識・態度の修正点・改善点を自ら確認したりして、次の学習に生かしていくことになるのである。このように学びの連続性・思考の転移性を保障できるようにしたことがこの自己確認学習の特性であるといえる。学習者は、提示された問いに対して他人事としてとらえることでなく、自らの切実な問いととらえることである。自ら考え、自ら判断して、自らの生き方にいかそうとする。問いに対す主体的対応をしていくのである。まさに問いを自己対象化した自らを変えようとする意欲的・目的的学びの自覚をみることができるのである。

結論的に言うならば、今回の「自己確認学習」は、図1 (P45) のような学習構造によって展開した。このことによって学生は曖昧な自分に気づき、目的意識をもって、他者と学び合いながら自覚的変容・態度変容を可能にしたものと考えられる。

この自己確認学習は、筆者の策定した実践プログラム (表1) に従って展開したものである。

この論文は、実践過程に、生み出された多様にして膨大な資料を基に筆者が解析したものである。実践過程には、本多泰洋教授・田中浩之准教授の協力指導のあったこと付記したい。

問—自己イメージ・認識— (自己内対話)	他者評価—自己確認— (学び合い・認め合い)	これからの自分の生き方・在り方の自覚 (自覚的変容・態度変容)
-------------------------	---------------------------	------------------------------------

図 1 自己確認学習の構造図

(註)

(註 1) 自己確認学習にかかわって CiNii (文部科学省学術研究所) の情報端末で「自己確認」の項目検索したところ 21 件の研究があることが判明した。これらの研究の「自己確認」は、学習者の理解度を把握したり、企業の実務教育における達成評価に生かされたりしている。

特殊教育研究では、「精神遅滞児の学びの過程」を検討している。その学習過程の研究においては、「問題の明確化、自己強化、自己確認、エラーへの対応」に関する事例研究<sup>(1)(2)</sup>をしている。

(1) 田中真理; 「精神遅滞児の物語理解における自己教示訓練の効果」 特殊教育学研究 30 (2) 1992 P55～63

(2) 佐藤容子; 「精神遅滞児におけるメタ認知スキルの転移」 特殊教育学研究 25 (1) 1987 P55～63

(註 2) 自己確認学習は、学習者の反省的思考と学び合いと認め合いのアプローチによる「自己理解と自己成長」を確認することである。言い換えるならば、図 1 にあるように、次のようなアプローチを実践してきたのである。

(1) イメージアプローチ・・・問いから「自己イメージ」を表出して、「今ここにいる自分」を意識することである。

(2) 思考アプローチ・・・一人ひとりの思考を基盤に、自ら考え、自ら判断して認識の深化を図ることである。

(3) グループワーク・・・他者との対話、コミュニケーションを通して、矛盾を指摘したり、協調したり、協働したりして、意識の変容、自覚的変容を通して自己の生き方・在り方・思想の確立を図ることである。

このようなアプローチは、ホリスティック教育における自己確認の方法論<sup>(3)</sup>である。

(3) ホリスティック教育研究会『ホリスティック教育入門』 柏樹社 1995 P47～52

(註 3) 自覚的変容とは、曖昧な自己概念をすべての学習において自ら考え、自ら判断して、自らを変えることである。そして、学んだことから自らの生き方、在り方に生かしていこうとする意識的、内的働きによる身体的表現である。その場合主体的学習者は仲間と学び合いという社会的、人間的営為を通して、個性の変容・

自己変革することである。そのことを筆者は「個性的社会化」というのである。

自己確認学習は、つまり、限りなく個性として質的变化を目指して集団過程において社会化されるのである。つまり、学びの過程において学習者は「個性化」「社会化」する融合深化する過程に「自己実現」を可能にするのである。

それは、21 世紀に生きる市民として生きて働く力になるものと考ええる。教育は、絶え間なく変貌する世界に生きて働く人間形成を目指した実践を志向していかなければならない、と考える。

(注)

(1) 小口忠彦・大石勝代 「学業不振児とは何か」(小口忠彦、藤田幸寿、井上弘編『講座 学業不振児の指導』 明治図書 全 4 巻の第 1 巻 P8 1970)

(2) 細谷俊夫、河野重男、奥田真丈、今野喜清編 『学校教育辞典』 教育出版 1988 P39

(3) 小此木啓吾 『モラトリアム人間の時代』 中公新書 1981

(4) 秋山治子 「保育音楽論Ⅱ 『自己確認の喜び』を踏まえた指導の方法と内容」 1990, 5, 1 日本保育学会大会研究論文集 P176～177